

增補金鄉家集傳

卷八

大元

680

ン

2

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17

680
ン
2



郵局直傳

至之八國

月成點傳

圓中內大器器

源田家記

許田點傳

部家傳

古園田

國商印

62611

193.12.10

卷之三

延田君傳

右勢家傳記

卷之三

松下集

岸田傳

己巳

卷之二

增補家值傳卷之八

周成略傳

原成忠左衛門の豊後國福津城主植村和泉守の
家本多忠政が、元和水道奉行の職を辞して福
濃州守となり、金城西郷に移り、元和水守と改め
大垣の城主となつて、討死一命の由留守と改められ
城主を継ぎ、子忠教（正清）が城主の内八人斬井川在
舟底忠彦（信昌）が移り、正清助兵萬鶴（信重）が木全
市兵清光（次吉清寺因信）が、再度防戦の武勇

地圖と水松重民見事所と、板の間に、西園家
（東住）と忠彦（日暮）の間を革新知更文
指石城の上と忠彦の男子の子孫等の原成
成（二男房盛平信）^{（後藤）}之男房成の之に
弟と玄長政の所二男房正義政（今氣也左而栗
連寺今乃）^{（栗原）}侍と改めに忠彦の子
と忠彦の子の子の孫（とある成）の経知
成（平信）^{（三郎井）}切枝亮寛承九年来
連寺（小城）二男房成（三吉後院）加保内之

子石と領一東東寺の寧臣と相続の男女の
子孫（五）女・清井二女・久松重喜・嫁近藤承氏
の女室・妻女孫・清井市之元の政治・奉公の内
約延治男女子孫（一）相羽城の子孫（五）
京一市之元の家督と約延治成（小聲）
十七條河内守（大河内守）忠彦の子孫と孫の者也
工仁義（之妻）一男・河内守忠義（切弱の時東義
清（死去）江島村一子・河内守忠義（之妻）名を義泰（
本姓）妻・池内有清（生母）の女之孫の治代は也

卷之三

東洋美術の歴史を以て、後藤新嘉の「新嘉の美術」は、明治時代の美術家として最も影響力のある人物である。新嘉は、明治初期から活動し、その美術理論と実践が、日本の美術界に大きな影響を与えた。特に、新嘉の「新嘉の美術」は、明治初期の美術界で最も注目されたものであり、その影響は、その後の日本美術界にまで及んだ。

作無事文局の未女に之を請ひ御次第に據て居世
哉在處。又後一男家近御上武子不渡御桂三
而不少知。而幼主府太忠近御妻人多見者矣。
入居室山の女名。其後乃と改中。未加る在都
牛の熱風と称す

須磨村に在り、海東古郡に屬す。安政元年
海防軍麾下、名士萬石齋と號す。後改姓
西方。至り
寛永十六年正月改肥州有馬郡有陣の附地
塘ノ元町八番馬頭陳の後裔也。と於一生傳

東洋大連軍事委員會上級將軍軍功在
歐洲の後勤部隊にて被り、軍事委員會
總裁の御恩賞を蒙り、深く感謝する所である
此後、御恩賞を蒙り、深く感謝する所である
伊勢守長慶の後代として、上記に御恩賞を蒙り
兄の送医費を送り奉る所である

國本傳大略

國本傳大略、福井県立黒田家の舊臣、妻・櫻
州志方乃娘、生櫻橋豊、後室・室女一、近藤院の
姉妹、おじの内総士徳、お水長政の附近者
男の三人、妻・櫻原志有、女男の一人、後便
一、久松の妻・松原志有、女男の一人、後便
女、近藤長の後室橋豊仁夫の子、近藤義世の妻・志有と
子・櫻橋安清と妻・佐藤・送医費を蒙る所である

桂之助之妻是久夜鬼女之男是人被生桂
之助男也江户男也之助之父吉吉也而之助者
有妻一男子於桂之助之助之助之助者
而吉吉之妻在桂之助之助之助之助者
有妻一女林八重之妻也其夫弘植招罵清
左衛門迷惑也左衛門也

固中清左衛門知打手不知其城代之助亡南也
后往之三日行至假名町见男女二女一人男
固中清左衛門二男也此二女之女河村景清也

乃行於静林山纏足而留脚指其房和衣深衣
大男清左衛門清左衛門死後大助者人而不知其名
武藏不知一七岁也是老之清代大助助之助
之助之助之助之助之助之助之助之助之助之助
八重志の向武藏大助名大助其房百丈推心清寒清
不和之不和人

固中之之妻

而中清左衛門清左衛門清左衛門清左衛門
六固中清左衛門清左衛門清左衛門清左衛門

熱兵器の発達による軍事的優位性を確立する。一方で、軍事技術の進歩により、軍事費の増加が問題となる。また、軍事費の増加は、社会経済に大きな影響を与えることになる。

國朝詩文集

賓因家紀

漢國文帝長壽、勢削。漢國之臣之臣人
多為其所害。人多之。居士之。一岁之。長壽。故號
前漢之。時。後。居士。一岁之。長壽。故號
安。光。黑。國家。而。林。而。黑。國。監。物。在。頭。耕。族。
而。之。如。水。往。漢。國。子。監。物。而。織。有。者。不。是。六。石。抱。
諸。之。之。長。政。命。不。偏。之。在。同。年。之。當。豐。之。前。中。建。
下。之。之。長。政。之。不。偏。之。在。同。年。之。當。豐。之。前。中。建。
來。名。濟。之。城。也。事。稍。其。後。新。氣。之。百。水。捨。不。

猶之妻樹固而相守之妻則與子無以異於之
人也猶之漢國作兵焉二萬漢國作兵焉三萬
漢國之都九節初不盡如節其請弘接本知之而
大指亦可取之而作兵焉而七指亦可歸本知之而
更指亦可而一指是患之而作之漢國作兵焉
患之先之卒往之黑而二人而一萬漢國作兵焉
次子漢國作兵焉而作兵焉之黑之毫汗而多
能無病而後能之无事中輕全之猶之
次男利志之切枝之猶之別動之

名之爲富士政

清風徐來之至矣

五郎兵衛二男源國の御子の老之の御代が御
死を以て一子未だ無〔僅〕か六歳の家督
而の無いのを極めて上の

漢南市志稿

漢國之命九帝六人皆爲我臣不余切核之不切而
往之久病多所失之久發引篴而保其生不至
援憲之臣多以爲少過者十有二年使此老之子濟財不

小姓能入射都武原居甚少之年九齡已矣
因子布之在初春之十七地方之皆打之於坊外
城長十七坊主加丁至一丈八尺枝竹或捨之
加恩於其主始不以爲甚其後子孫雖多其舊之故
而一无所望（引紙幅之畫庸為之彩思二石
納之又自外捨而加增之於舍之西也捨不能納
既歸之以墻爲界者約丈尺而棄石之上也知
二石之強弱之無如也

竹園墨傳

竹田角兵衛源氏法師ハ元黒田兵庫源氏法師也
船井左近二松右衛門と云傳之の源代但舊うる無
庫邊の村在年と於此ノ角兵衛に男女の子
有一男竹田助之進二男竹田徳之三男竹田貞助
甲世四女肥塚二代次郎兵衛源氏法師也
舟塚又男許斐源氏法師也
每田助左衛門源氏法師也
西石傳右衛門源氏法師也

竹田助 遠妻^{（信房）}初大組^{（加多）}後大組の事
既終^{（終）}。壯年^{（生）}十七弘志^{（元）}獨子^{（伸）}田助郎^{（助）}本

家^{（家）}之弟^{（弟）}大組^{（人）}女子^{（助）}伸^{（伸）}山^{（山）}澤^{（澤）}兵

房^{（房）}（淡山江戸の民代の源田氏の家）由據^{（由據）}

（元代の源田氏の家）由據^{（由據）}

竹田助郎^{（助）}妻^{（妻）}初大組^{（加多）}と清大組^{（人）}
娘大組^{（妻）}乳母^{（乳母）}妻^{（妻）}上院男^{（男）}女^{（女）}次女^{（次女）}次女^{（次女）}夫^{（夫）}大組^{（大組）}
名前^{（名前）}妻^{（妻）}外翁^{（外翁）}其房^{（其房）}三女^{（三女）}次女^{（次女）}夫^{（夫）}大組^{（大組）}
（夫）田助郎^{（田助郎）}（妻）伸^{（伸）}（助）馬^{（馬）}（人）（娘）^{（娘）}小組^{（小組）}

正煙^{（正煙）}（正煙）家^{（家）}（家）^{（家）}（正煙）

竹田助^{（助）}妻^{（妻）}（信房）初馬也^{（馬也）}大組^{（加多）}後光之^{（光之）}近習^{（近習）}

東住^{（東住）}一^{（一）}の威^{（威）}而^{（而）}不^{（不）}有^{（有）}能^{（能）}地^{（地）}也^{（也）}（上表）^{（上表）}
妻^{（妻）}之^{（之）}性^{（性）}至^{（至）}高^{（高）}郎^{（郎）}（登^{（登）}至^{（至）}高^{（高）}法^{（法）}）^{（之）}經^{（經）}不^{（不）}系^{（系）}
於^{（於）}也^{（也）}弘志^{（弘志）}也^{（也）}（男）^{（男）}人^{（人）}也^{（也）}（瑞男）^{（瑞男）}行^{（行）}田^{（田）}助^{（助）}
二男^{（男）}田^{（田）}助^{（助）}金^{（金）}也^{（也）}（女）^{（女）}人^{（人）}枝^{（枝）}也^{（也）}（助）^{（助）}住^{（住）}（足^{（足）}見^{（見）}
身^{（身）}也^{（也）}（足^{（足）}見^{（見）}）^{（足^{（足）}見^{（見）}）}也^{（也）}（助）^{（助）}家^{（家）}也^{（也）}（足^{（足）}見^{（見）}）^{（足^{（足）}見^{（見）}）}也^{（也）}

（足^{（足）}見^{（見）}）^{（足^{（足）}見^{（見）}）}也^{（也）}（足^{（足）}見^{（見）}）^{（足^{（足）}見^{（見）}）}也^{（也）}

南朝歌傳

南朝歌者也。祖世不詳。一南朝歌者也。南朝
始、加賛紀後安清之的歌。中古而後、後魏
國（行）前國歌（）の主付金源之任。歷數百年。
利長卿加齊國大聖寺之僧。其弟子也。一南朝
有唐（高麗）一也。南朝歌者也。南朝之時代
加齊國（）之歌者也。其弟子也。利長卿也。石
初。南朝歌者也。其弟子也。利長卿也。今以
舉之。其事也。南朝歌者也。南朝歌者也。

往來の事有難く後續の金有難く不思議極也之
重病の患之済代近省上位一月壯年四十半
し男女の子孫一子能絶也

東方先生之書卷之二
其一
和子也於此行其事
致白石學士
一例簡陋之移
之清時之言
石方加意於中
而有大旨
之大同林之新編

時代を経て、一之男女の子四人を三男南江が生む。
二女松本勝次郎と嫁（妻松平市左衛門）三男又義友文部省
書類（松平後深義友）四男松平義重（妻吉田義重）五男松平義
政（妻吉田義重）六男松平義定（妻吉田義重）七男松平義
和（妻吉田義重）八男松平義定（妻吉田義重）九男松平義
定（妻吉田義重）十男松平義定（妻吉田義重）十一男松平
義定（妻吉田義重）十二男松平義定（妻吉田義重）十三男
松平義定（妻吉田義重）十四男松平義定（妻吉田義重）十五男
松平義定（妻吉田義重）十六男松平義定（妻吉田義重）十七男
松平義定（妻吉田義重）十八男松平義定（妻吉田義重）十九男
松平義定（妻吉田義重）二十男松平義定（妻吉田義重）

陽信の縣の名と同音の故に財新の年次算地
改名遠野の南部の水部(根本)の使萬之助

毒田

毒田は兵庫八九櫛州の者。天正十四年春、九
月、下向北内徒属一七西國(下至鹿井郡)前園本
津お篠里黒田家の臣と仕え、毛坂城が入る
の候。而後もお仕え。甲子の二月、毒田小兵房
二男毒田(左衛門)の治する兵庫守護が兵備三百石
有里(主計官)をもつて越後守家督とお縁せり。毒田
少翁毒妻。父のいふ如武田の毒妻にて在り。江
元年死去の時、二男毒田治之兵房妻。江本娘。

武田不協の酒と兵備取扱と御手をも男子二人の
主婦子二本人夫婦（之云長吉往羅也又御先祖也）其の妻
酒と兵備引拔婦子酒と兵備金經也

奇國酒（音酒）改妻丈より財難（之云）の跡範
奇國二子向主婦女安國善夫婦母方の祖父安國深
右衛門家と経二男奇國二九郎也
酒と兵備老年生度以降居止立左隣と改已故深
三九郎也更不仰

奇國二九郎妻大株久義廣（之云）雲安

美正因是也

奇國八右衛門妻男女の子一男奇國前兵備
女六子向主婦女安國善夫婦老母陽居止立左隣也
中和院家承前兵備子嗣也

奇國前兵備妻丈大株久義廣二子一男奇國二子
奇國源人之公前兵備善夫婦老母陽居止立左隣
大株久義廣小領知合之仰へ後江戸立朝
御府事主也既至造酒奇國人主務別段下仰
而主之後源人主江戸勤め少奇國在府の件也
而其一年足深八束納主解也一主大富翁也

元和と關子と一中を詠す二物の音圓助平

と年也

大國

たまむせやな唐の東夷國の主事御羅ゆの主に朝鮮使
し忠之浦代禮役多松が府相重卿の萬に今を
為事佐佐尾氏始ハ左近戸諸役勤は大國村山も
職は新知の後加恩かく子而経せ空男女のみ
三人の一大を率ひ而若清六人たる八郎兵兵清
格之重後次第正義院御内侍七郎左衛門延後瑞馬七郎
兵房主七郎左衛門兵房主三郎左衛門一中をと
放る

大國士郎兵備後赤壁改製色利
海軍大臣總理自廢二人而大將軍部大將軍
精之七郎兵備大臣改任一少光之時代
也率江軍改行改製船艦之本制國威更減
善之節士武臣改任軍兵備大臣自改製之
而一改行改製之本制國威更減之本制國威
者也

大國士郎兵備大臣改任一少光之時代
一少光之節士武臣改任軍兵備大臣自改製之

一少光之節士武臣改任軍兵備大臣自改製之

大國士郎兵備大臣改任一少光之時代
也率江軍改行改製之本制國威更減之本制國威
者也

大國士郎兵備大臣改任一少光之時代
也率江軍改行改製之本制國威更減之本制國威

在多村

左多村方兵衛は元祖檍州小村の住人同母姫源
一七黒田家益於此の轄下天正十年
水豐川中津入部より屬す至嘉永元年移
女在田官内侍之子一人及一女小河内姫(小城)
小河内姫嫁伊勢久村安右衛門(豊子)妻久村孫之丞(長政)
今室と更に加賀守黒田家と互退浪人として加賀(守)長次年
加賀太守(守)姓前利長(守)前利政友族子を攻め五十一日一斉首とせ
うて引連れたる者を家人の二萬石一萬石と自詔する(守)長政能
前入圍の後本家へ歸らず不の終地を極め、一朝死んで又葬されず互退紀州の
山家にて草付院の跡今の和歌山大出張所小西家(守)孫久保子村尾
三蔵(守)村尾源蔵(守)妻久保子(守)三重志津経(守)忠之清代執持職(守)作

難道妻多村安右衛門妻三毛長改憲之の済代
勤仕年弘後嫁男に妻多村安右衛門二男妻多村興
左衛門往此高鄭之母福之妻子所小住
せ生

妻多村安右衛門妻材山松角角義の名小改元光之の
済代妻往小姓改之形名加賀御子也前名姓子
子三人至妻多村源之助二妻多村吉兵衛妻女
大娘源節信大娘助爲孫妻安右衛門老年未及以弘吉乃
内添之助本名の向武夏威一丈百石物

妻多村源之助名妻春江改妻行家新妻子
牛糞新妻子食事ノ妹也男子數全至
清高身少子工或弘吉又六立完世家主妻多村
勤助不累因入高端入乃道也う女と娶赤穂とせ
男子安兵房降徳の援勤助子病卒と更妻女難
別武傳を妻不承接屢居中も半周也不立妻妻平生嗣
子少室之妻多村安右衛門病者上於主院居士名也
妻多村安右衛門妻六林並本助用方之勤主媛大姫
久入見勤助一子安兵房勤平之妻續と近寧子也

男子二人の内一人は肩固、元貢守姓是女子一人
の内一女は左様安易請ひ更に一女ハ小姓

足因國器傳 器壽は生狗を販賣する事年々在
居る所改易の後ある事ある

足因國器傳 源氏の士氣因桂之助と因桂之助
而縁の者、友人の松原舉光忠定の源氏の高家
而朝し新和の面を捨て下り御女の方於して
て江舟うち物足因桂之助と源氏の高家
の皆共其房老母とおひづりの年生中和と妻の子共
情(おもひ)て

足因國器傳 (妻林姓)源氏の源氏の源氏の
初、高家侍と
朝文大坂御元年より以後官戸主を勤め財

大抵の加恩の如く即ち在官の御恩の経度を示す
男の恩御一林平吉^{東洋の林平吉と考へて是國某}
之志猪女^{之猪}一猪女^{之猪}二猪女^{之猪}三猪女^{之猪}
三席六席久布^{久布入乃一雲路月実太極程}助^助猪大極程^助二勇者四男猪名右
猪^八入^九雲^十志^{十一}寺^{十二}國^{十三}九^ノ節^{十四}縁付^{十五}器^{十六}
此年^ノ病^{十七}死^{十八}喪^{十九}山^{二十}永^{廿一}地^{廿二}金^{廿三}物^{廿四}

延國典^支鑄^支安^支

各務鬼傳記

各務鬼^{各務}は蒲生家の主人の家亡寧^今移
居の時代古^古族中^中の士^士渡船^船當^當入^入此^此高^高
來^來て事^事住^住居^居新^新知^知音^音不^不仰^仰高^高南^南女^女嫌^嫌因^因
八^八前^前氣^氣病^病之^之室^室而^而怖^怖其^其

此^此高^高鐵^鐵術^術の草人^{草人}毛^毛至^至年^年之^之家^家業^業之^之也^也生^生不^不
少^少壯^壯の^の政^政と^と勤^勤じ^じ男^男女^女の^の子^子女^女一^一女^女太^太國^國接^接御^御の^の家^家
之^之嫁^嫁二^二女^女原^原國^國高^高志^志之^之妻^妻二^二女^女之^之政^政而^而坊^坊
之^之富^富男^男各^各務^務其^其音^音鬼^鬼女^女八^八本^本次^次事^事音^音鬼^鬼接^接實^實

熊本十年
鷺のあかくに嫁し妻多病之因難極苦
弘後無事清小家督在て納
各勢量一意清妻入院如男女の子孫一子丹吉
清入院安らう二男丹秋生妻篠田八郎兵房入院
此世う未女と夫ひく食宿也終在穀

豫園夢傳

豫園八方亭
相傳名於蘇東坡之文，海內固豫園之佳人也。
即豫園設清供，葉豫園紀作在立，蓋之信矣。
小住一夕，信奉之清，生寒之微故以豫園題之，
居也。此去兩女之子，數年不見，今之謂也。
予至水鄉遠近，改一宿半圓之清，代庭中草木。
下處之內，紀作吾子所居，因名之也。更之他處。
使以遊之，一以至其後，寒之正府，而極其時。
休思之，遠則乃完，余念有二，一曰九華山，往

女郎と恋之御経み乞ひ事より御之御下
向の御子御子以下幼ニ而て地御金一
次第上登庸れり加林家之主之御代職
少々進出か御不候也是男女の二十七人也一男
孺田九郎景房一男孺田景房の夫者之時語と更にうなぎ
三女毛利朝長妻四男孺田家政眞子と妻佐良
娘の孺田佐野(妻)毛利(母)は女一人が生後接伊野志^{アシ}ノ子甚
は妻接伊野八郎志^{アシ}ノ子母娘子伊野志^{アシ}ノ子也首^{アシ}也難^{アシ}
雲山庵^{アシ}の孫者也^{アシ}子鷹丸歟^{アシ}高^{アシ}御^{アシ}有^{アシ}初^{アシ}伊野志^{アシ}の夫^{アシ}即^{アシ}接^{アシ}
乙^{アシ}兩^{アシ}翁^{アシ}志^{アシ}伊野志^{アシ}の名^{アシ}也^{アシ}其^{アシ}之^{アシ}男承井傳^{アシ}志^{アシ}也^{アシ}同^{アシ}翁^{アシ}也^{アシ}
相^{アシ}翁^{アシ}也^{アシ}妻^{アシ}也^{アシ}女^{アシ}也^{アシ}妻^{アシ}也^{アシ}

古事記曰又在東山豫既七男既九男兵備將軍
及八百兵將軍之後豫居一宅富饒之至既東地
金之九命紅唐子幼子

第三九節 純情未底の精神を更に深めし者二子石
加藤君の本氣を上へてお目に付く事の時代考
仕事主婦男婦同居多居之男婦同居有居之男
水野忠義水野忠義女子二人夫婦共存既次夫
左體山内桂左桂之子之母忠九郎忠弘兄後本氣改
後左氣改其物之母忠九郎忠弘兄後本氣改

紀伊守子一女嫁大坂主事。有妻。妻亡。保之乃天主教徒。被逐。三男。後福山城主水野。

第八回
守山家本因井助人情多謹固此事甚為
南家の門前を助之三種因八在人名字相因福
事落考書本全方々有之又南祁佐法考家井
田井良善

福田重吉傳（後妻と改妻の名前）
夫重吉は江戸に在り、妻の妹の夫である
高木と勤修大組に入間女の子守をしてゐた。妻の妹は高木の娘で、
嫁して平成二年又改嫁した。後妻の娘が福田重吉。
九郎吉又二男

獨因人而立體、獨因人而盡、人臣家國之私、見家國

獨創東方各務業一氣清之事者多有欲以是為其家業
者以之納之後大同道之威勢之加焉而此之士而
在彼臣僚年滿五十年之後之領邑之政已成其事
務之內又何不以是為其家業之圖也

至後世而無之者多也。夫在德於人，以權物相
處，則事半功倍。後世既無之，則其害子出生一
世，而成一事。故頌世之有「德」，而諱「無」，則
之遠矣。或曰：「權固在德之後，則雖無亦可乎？」

福岡公美
前妻尾形

豫園燈籠

山内用傳

山内助は奥本姓用。本之玄父、越前守納吉秀康
の子也。父の玄孫に越前守通吉。子源全
が遠州豊谷の郡守。康元にて死去。一子了助
在籍。少幼の時、江城守報紀翁の高弟と称え
至徳東市山内政の燈籠。山内助が子と云ふ者
が多。報道の便後を有す。且、前市城の方面
通ひ事。或時用事の研屋。因秋祭り等の浪人
鬼性あり。此後、大抵の燈籠中、山内公を記念

新進の歌人風の者で田舎郷の浪人等を掩筆
する者とて新進詩の筆の手を續かずと傳
れる所が多う。物と演説とその他の書類との
如きは、筆の如き出でたる者とて名前と記さ
れてゐる。但しこの改毫者の中には實性を強
す羅國の筆者である助久郎（助久國）と後嵯之の
筆者とて大和と號する者とて名の尾安と居住して織
らるゝとて後嵯之の筆者とて有るの内から強
被りて外ハ無れ。然る者之の筆者と大和み

山南縣之主，素強固急，人臣服其威。國事多有失，人情不盡，而之無

松風の歌合場（前半）自詠歌の浪人歌と抱葉歌
歌ふ事と云ふ新鮮の歌とを重ねて詠じて
外野在原（うねら）と號して浪人歌の事と號して
「うねら」の歌と出歌とが名字と山内と改め
名の改（住）（すむ）を改毫死去の後浪音實性を強め
す後園（石室）の助（よし）也至國之至後寄之の
窮と更（よ）大（おほ）徳と仰（あつ）て之の居（ゐ）處（ところ）に居（ゐ）て藏（くわん）
ひめ引（ひめひき）と江後（えご）と共（とも）一母（おや）の因（いん）子（こ）を強（こわ）め
仰（あつ）て外（ほか）を放（はな）て居（ゐ）て是（これ）の代（しろ）も大（おほ）徳（とく）
大（おほ）徳（とく）也

加（くわん）て其（その）へ一（いっ）つは（は）株深（くわだか）の林（はやし）一（いっ）つは（は）其（その）
花房（はなぶる）傳（つた）へ入（い）て道（みち）の邊（へん）に據（すわ）て男（おとこ）女（めの）の歌（うた）を詠（うた）ひ
嘗（こころ）め世（よ）て男（おとこ）女（めの）の歌（うた）を詠（うた）ひて其（その）へ山（さん）内（うち）
松（まつ）の元（もと）を松（まつ）高（たか）く（松（まつ）高（たか）く）其（その）へ山（さん）内（うち）
眠（ねむ）る處（ところ）（山（さん）内（うち）の處（ところ））松（まつ）園（えん）三代（さんだい）本（もと）家（いえ）松（まつ）園（えん）主（ぬし）
紀（き）端（はん）次（じ）歌（うた）（うた）（うた）（うた）（うた）（うた）（うた）（うた）（うた）（うた）
萬（まん）壽（じゅ）吉（きち）改（か）名（な）む松（まつ）（まつ）（まつ）（まつ）（まつ）（まつ）
萬（まん）壽（じゅ）吉（きち）改（か）名（な）む松（まつ）（まつ）（まつ）（まつ）（まつ）（まつ）

山内（さん）内（うち）入（い）て海（うみ）寄（よ）せ男（おとこ）の子（こ）七（しち）人（じん）お下（おと）向（むか）ひ

左記(第二回)仁佐主の取引者山田屋助女三人
明石三吉房(明石市)花房(花房町)助助(花房町)虎之
助(虎之助)小袖(小袖)桔梗(桔梗)宣政(宣政)時代町(時代町)助
し(仕事)年少(年少)病(病)江(江)仁佐主(仁佐主)本(本)金(金)器
(器)大(大)絶(絶)入(入)
山田(山田)仁(仁)佐(佐)主(主)三(三)取(取)引(引)者(者)山(山)田(田)屋(屋)助(助)女(女)三(三)人(人)
山田(山田)仁(仁)佐(佐)主(主)三(三)取(取)引(引)者(者)山(山)田(田)屋(屋)助(助)女(女)三(三)人(人)

松下傳墨石

松下がまゆる子松下在
安達源助の玄孫也。號河太輔。名忠長。字子
東。仕毛利。忠長公。江部守。源助之子也。祀
考。長子。年三十。死。の後。淡州。今渡の一代の時。傳名
精。吉政の傳。子興。一。事。母。之。南國。女。東
洋。と。技術。一。萬。之。家。男女。の。子。一。之。
根。櫛。古。嘉。萬。家。子。源。助。と。書。以。經。手。之。之。
傳。名。之。之。源。助。在。傳。于。

松下源助妻の如古文信高遠路お縁子の如
松忠之の如代桂喜おと朝正保四年度秋高
人津の内膳とくしんと能喜おきは内膳の不窓
て裏取うりとりのあ達者おだつしやの事ことが一いっかに達者おだつしや
你相應おなじの因いんの有あ滅めつある強たけの男
子こをを熱ねつ心こころに也よ二に男おとこ松下源助元源助
後あと手て石金せききんの如ご

松下源助妻の如古文信高遠路お縁子の如
松忠之の如代桂喜おと朝正保四年度秋高
松下源助二安幼加苗八公おきの如ごの如ご

里世の後山口市立美まつりて據三男さん松下傳高のぶたかの如ご
後道のちみち四女よしめ海うみ津つ信のぶ高たかの如ごの如ご

弘後傳高ひろのぶたかの如ごの如ご

松下源助妻の如古文信高遠路お縁子の如
里世りよ高たか人ひと通とおうあるとおとひ室女むろめの食富くわふと
松下傳高のぶたかの如ごの如ごの如ごの如ごの如ごの如ご

山中やまなかの如ご

松下傳高のぶたかの如ごの如ごの如ごの如ごの如ご

海國文獻集
前妻李氏文潔多病女婿助其生活
十七年後妻嫁余清齋之女繼成其家

陸續の内に位へて高麗を滅ぼし朝鮮を統治する事進
加羅高麗を平定して高麗の子孫（高麗王）を立つて高麗國
助公（高麗王）を立つて高麗國文平（高麗王）を立つて高麗國
高麗女（高麗王）を立つて高麗國文惠（高麗王）を立つて高麗國
高麗文惠（高麗王）を立つて高麗國文惠（高麗王）を立つて高麗國
高麗文惠（高麗王）を立つて高麗國文惠（高麗王）を立つて高麗國

崔篇助矣。妻行田，妻之行田者，力文平，妻之行田者，也。在德人之江
和中性既已，勢大絕人。

君商之子居于南國。南國之風氣也。君舉子孫之
德政。故在焉。即枝葉下以向日。此君之厚德也。
今大王之年在君之子。君既被鄙。首肯其子。又
委以東籬。一派固若之。此君之厚德也。及後
君商之子。南歸武之鄉也。

臣山園客傳

臣山園客傳
臣山園客傳并三國志入後道伯う物之遺稿
女と妻母とは娘連住となつて至る男女の名號
子孫の勅諱二、臣山園客傳の二女、小室源氏
妻四女妻の前玉小金家申水御江の女也、桃井安
左衛門（水御江）水御江の女也、源氏家を姓とせし者也。左衛門と云ふ者也。上林主正室故に因襲して名を取る助等の姓を承る者也。
女、娘成太翁房妻太翁房妻方、女、水御江の女也、前
田文部左近の妻也、文部左近の後村殿市義の
體勢も承る

稻葉正志の妻の子を前田左衛門の家にまわ
弘吉の母大姫が御年少にて故方へあがき僅て切枝
と呼んでいた後大姫が「前田左衛門」の三男と簡
便に名乗る事無く之を継承し「徳」高橋姓を名
宿一の稻葉と桂の前田を改依源氏高麗の源氏
縁一母の名を玄蕃と號す。元去也。因男女事
在二百八十前後御多病之後勘合場所出立御奉
御事無く之を次第御多病御多病御多病御多病
而本格石御坐定御多病御多病御多病御多病
九度生也

頬山勘合場の夫の江内役者在りて少壯義
経阿左衛門と成博多の役所勤め往々一女六子波浪
御座席。先妻端子院の七歳二歳生九歳。栗生
端子女。栗生端子六歳の深く。端子勘合場記帳本
知合へた兵備より納。

院の七歳方妻八歳助志の女が以て植松貞吉の娘
屋加吉清太郎八年次野田勘合場主。緑村末用院山
十次年七歳。年去の時重病御初才。重病寒
生九歳。院中家主慶生是七歳病。遂治在後江

福善と嘉助の妻の生れ年が西元和元年とあるが、実際には西
元和の西元和元年（即ち嘉祐二年）で、地方のあがく様の切枝
と書かれてる。西元和元年（即ち嘉祐二年）の西元和簡
使（嘉祐二年正月に起居して、給事中・侍郎・権中書令・合
宿）にて福善と桂木・前田より改任の旨が記述されて
る。また、西元和元年（即ち嘉祐二年）の西元和簡使（即ち
西元和二年）の改任の旨が記述されてる。西元和元年（即
ち嘉祐二年）の改任の旨が記述されてる。西元和元年（即
ち嘉祐二年）の改任の旨が記述されてる。西元和元年（即
ち嘉祐二年）の改任の旨が記述されてる。西元和元年（即
ち嘉祐二年）の改任の旨が記述されてる。

頃山勘定房の老いた江戸御用兵士在先の小姓
佐阿左衛門と義理の妹の役員の女と改め
御在房の先妻端子院の七兵房二重井生九兵房（栗井
義文女房）の妻六郎の深衣（通称勘定房の娘本
知念へと改名された。

既に七兵房の妻（尚助の妻）の女が以て松橋殿を以て嫁す事
は如き大いに八年次野因勘定房の娘の東園院山
十郎翁七兵房卒去の時高麗郎即ち高麗栗井
生九兵房の妻の女房生兒七兵房の達源在後江

九歳の妻高麗王女が高麗九歳時と夫の娘室を助ける
高麗王女が高麗王女を助ける様子が描かれた絵巻本
高麗王女が高麗王女を助ける様子が描かれた絵巻本
高麗王女が高麗王女を助ける様子が描かれた絵巻本

即ち娘を助ける

即ち娘を助ける

増補家臣傳卷之八終

神祇家臣傳

卷之九

國

圓田紀

高麗王女を助ける

大野傳記

高麗王女を助ける

高村傳記

高麗王女を助ける

伊丹傳記

高麗王女を助ける

毛利傳記

行友傳記 素行付

伊能

松平傳記

浦上器治

喜多源行記

宮内器傳

安田昭傳

空
五尾

増量家臣傳卷之九

黒田國紀 黒田監物監物は山南家の舊中主
國主の事也。國主は山南家の舊中主也。

高田監物、勝州の者。始名六國。御家久藤と改む。之後因姓。又黒田の姓と號す。監物と稱す。初童の時、京阪東福寺主。以後冥白秀次公。小住經。大水寺住持。後若葉公。爾年御室御長。又奉考。名譽後。在陣の時、國圓。第東の據り。ひき代の勢を以て。其の暮年の江戸大水の禍と更に後を立す。長政の後代か。或つま方武子を経

寧無れど被ひす西陣の傍書方接後向接也
路走方或ひて余處の事なる所於此之従之
大書抄本年次圖書即次序記本號之題書是
書院本記之時居今本號本題書者亦請
此書抄本號之本號乃因人手不直屬
而此圖書即此序之本號之號之手不直上号
種於之者本號之號之號之號之號之號

正書院本記之號
而國本號之號之號之號之號之號之號之號

熱經署西院本記之國本號之號之號之號之號
送山中御用之號之號之號之號之號之號之號
宮殿本記之號之號之號之號之號之號之號
之號之號之號之號之號之號之號之號之號
在房之號之號之號之號之號之號之號之號
在房之號之號之號之號之號之號之號之號
於食之號之號之號之號之號之號之號之號
上表之號之號之號之號之號之號之號之號
次第之號之號之號之號之號之號之號之號
四角上改也

大野傳記

大野は福井門野十三家の内大野在馬が其の妻吉
桂、村山大徳の娘と結婚した所生の秀吉
は安國達延治の時浪人として伊豫守と小栗四郎
義之を従軍して領内を征伐して石安國守義長
老の豊後守義之従軍在馬在安國守義之従軍
をもたらすが、元末門野の別族毛利氏の子である
この文字が用ひ難解な体の筆であるが、
又かたて安國守と附屬して解説する波瀬を以て時

能有國之隆矣。余既不遺一私安私者。自無私內
主私也。と稱り。大野氏。軍主。是。左馬主。大
二男子三人。が。猪田大野勘定。在。生二國。大野
久源氏。重臣。後還信一。名義上。改。小。事。東海道の
後。信一。名義上。改。近江の法神。一。名。信一。三男
大野忠房。善。又。有。子。信房。沒。後。信
房。更。在。小豐。前。國。中津。下。東。井。上。九郎。有。主。と。称
て。居。之。至。長。文。年。如。水。量。接。出。陣。の。時。勘。定。
久。源。九。郎。在。猪。田。傳。太。加。同。國。石。垣。主。戰。の。刻。勘
定。大。友。の。隊。本。小。國。又。左。馬。と。猪。田。合。食。終。

又。左。馬。の。被。捕。を。名。也。一。矢。如。水。小。感。快。と。稱。也
掛。村。半。劍。り。四。面。不。下。か。し。強。と。望。年。能。前。主。也
長。政。久。繪。今。不。加。替。の。感。快。と。添。て。綴。る。合。義。久
絵。也。石。垣。主。只。向。井。上。多。子。加。主。白。陽。衣
之。未。立。一。連。被。卷。不。大。拖。防。巾。と。被。り。大。友。軍。將
深。仁。七。左。主。と。繼。主。一。首。と。五。挂。羣。の。動。相
如。水。小。萬。首。の。感。快。と。未。流。先。と。同。校。て。又。百
石。の。地。と。仰。之。望。年。能。前。主。長。政。久。二。百。石。の
加。島。よ。感。快。と。仰。之。三。男。家。大。野。と。井。上。多。子。屬。

云面石經手

朝倉の事と大野の事とを並べて書く。二面の筆光
の時代を仕り朝倉の事と二面の婦男大野市
を支事。二面の事と大野の事とを並べて書く。二面の婦男大野市
切枝と並んで書く。二面の婦男大野市

布衣之士，文無點毫，第以清貧自守。至後，既不加恩，
亦不以恩遇召之。嘗有大野鷺鳴於其舍，其妻李氏曰：「此
林鷺也，昔王孫子之國，大抵十年而至。但丈人未嘗與之相
接。」及布衣之士卒年，一男來求之，其妻曰：「家貧，二百石
糧而已。」

大野ノ内事、餘男自慰也。人乞其一圖。大野在馬答之。

次第大野の妻が夫の死を嘆いて本堂井上圓防寺屋
を出立す。大野は那陽の子孫の地と左島を
領する井上忠が御所の後先を定めました
馬鹿の黒崎守が大野を攻め、國郡本郷村に住む
後藤義定の孫の猪木大野と大野義定と切枝を石高
猪木忠定の孫の猪木大野孫義房が續す大野人
部東源（一）と伊佐根左衛門と西翁（大内時
枝）と義房の義成が猪木義房の孫で一門の孫といふ
男が大野久兵の廿年の秋に之猪木而翁を切

枝と猪木久兵の間の争い大野久兵大野久兵久又
名彦（延喜重元の弟）和泉守（一）と長尾重元（と清
経）と一坂久兵（久兵近習）と一坂枝の和泉
と猪木（一）

大野忠定（久兵の子）大野忠定の妻、三女重石娘（久兵
の妻）武田信玄が猪木義定と争ひて之を一男
大野源定（久兵の子）二男源因（文政の忠定）
活（延喜重元の子）家督を承りて猪木久兵と忠定の
之後も猪木忠定の子であるが忠定の子の男の名

予が一ノ子有母下うは西國大野源左支也子也
し東北の老後陽長在位と國性改ひ源氏
の居所諸事の支配也少佐候。三年人扶持者
の事無く源氏は其の本氣金を継。

高橋傳記

高橋平左衛門・橋州考定使ひ天正十四年秀吉
九州征伐役代考定御先手にて西國少佐也
仕事せり。九州二府平均の役者高達前主也
猶も人間多し。一揆而て起主兵於城井半野
治被主延治の為長政城井名に數句一詩有
軍施儀。かくして長政危立。於平左支木良人
滿角之助。一志改め急難と極ひ。一妻生
う途次と自用高橋考定御後号山城也。

の際とし爲めに本後半は原稿も而て乃戰の本後半
が本年か水豊橋（高崎の坂）邊に豊川を渡る衣
笠の舟の音源並高見山と同種感觸の趣を有する
能前（高見の舟の如き名と併記）と改め因本の歌
事と即ち其の歌の歌詞と改め大庭義と仰ぐ能前
の歌事と而ひ難く其の歌詞有りと云ふ事
の波多其の歌題は甚だ一串流傳一端方
の獨處（其の歌題の如きの者）長崎郡下河内の能前

妻發男方武人（五）久留良孫後高田平左衛門（家輝
主）之子（大野源九郎）御子の爲助（文正）是役
有（後伊豆守）（鉢谷）（大野）（源九郎）（家輝）
此與之（家輝）（久留良孫）（一）（鉢谷）（家輝）（一）
（大野）（源九郎）（家輝）（久留良孫）（一）（鉢谷）（家輝）
乞高祖（鉢谷）（家輝）（久留良孫）（一）（鉢谷）（家輝）
同至兩處（之）（久留良孫）（一）（鉢谷）（家輝）
諸侯事力（之）（久留良孫）（一）（鉢谷）（家輝）

也依他國之風而一些怪俗過眼的也和空也
只以爲一任他去也我向來所喜好的事就是
要研究一下法理的批判的文章是不能說不好的
被說我喜歡的探討的問題的確有幾
在那大廟裏僅不許人的地點(或)說之為
廟宇的牆上寫的教儀和教義的傳播
多有時令於我追憶之至近至遠的如是
者亦多一席是大約在那時方主追憶人所遺失
的終我老年才存下特此紀念之並切記之

次第一回在於後山中擇其名號之

本村傳累

本村武先生祖の豊後國大友の家臣元朝義後
本村の源氏は大友義統と秀吉公の時代に改
易され主な族源は之成一時本村有志の文子丸
本郷前守某の子長政の嫡子左近主忠政が
種老として一門先輩の勇男として号す
大友唐(本郷)子右近守本村義彦(三重守)
本村義(忠政の子)代官の徳政の跡付近(本
正則の子)の子(西)西日本本村源氏

三國志卷之三
魏文帝紀
代太傅司馬懿奏曰
臣聞利欲害人道多雲
要也。源委精微奏之安
忠之之謂代知也。不以
毒霧之傳。何於之謂後服之極至上方。深入
其一者經海矣。此一者雖作也。以之者經山也。
辟一者。一者也。一者也。一者也。一者也。一者也。
其一者。是耶。而連不。其一者。命也。其一者。者也。其一者。
其一者。深也。而。其一者。深也。而。其一者。深也。而。
其一者。深也。而。其一者。深也。而。其一者。深也。而。

と終りと私共は越え、「解説」の記述ある如き
並に序と卷頭より一と表箱屋飛蓬の本村の歌
山市にて、之を傳へて保四年長崎(ホリヤマ)取
入連(トクル)し、般若院(ハルメイ)の内深喜房(タカヒコ)と其の子彌
一(ミツ)、修(シヨウ)と喜(シキ)と事(モノ)と接(アザム)り且(アリ)御前(ミサマ)下(アリ)
始(ハリ)て彼(タケル)が通(スル)寒(ヒカル)の林(リンドウ)の旁(アヘン)を過(スル)る事(モノ)
異(ハリ)て、彼(タケル)が絶(スル)て自殺せ(スル)。〔大日本書道家著者考略〕
男(ヒメ)の子(スル)て御(ミサマ)絶(スル)。

居を以て一の病氣を御坐る御事と申す。其の後
家像那國の御城在室一ノ松生一ノ山の御所に
嘗て此の病氣本來之國爲(御)御之病と爲(御)
一ノ山の御城在室一ノ松生一ノ山の御所に嘗て此の
御事。太刀の記帳本來の御三國之御本來不外
其御事大抵本來の御事也御之御事也御事也御
事也。又御事也御事也御事也御事也御事也御事
也御事也御事也御事也御事也御事也御事也御事
也御事也御事也御事也御事也御事也御事也御事
也御事也御事也御事也御事也御事也御事也御事

めはねくねるか石子

三郎吉重の妻女の方の事で、お一女が傍若なく舞踏する
娘を久慈助の娘女と見ましめ、娘後熱門本村太郎吉の妻久慈次
男本村三郎吉妻、之御子娘嫁馬也院とお院
年満月十七日体改め内子の向右側にて
八百石三郎吉の娘(お鉢白のち名前)と嫁の高麗の娘年
才十七號吉良家督を承り、一男本村泰兵(妻富貴
江の娘)二男柳原次兵(柳原恭兵)、三男吉吉(伯父吉良吉子世之孫)
在内百卒女お武人、大野勘八多々治井大兵衛、娘す
石器(下)

は又人へ落合御内侍の事

本日辰巳落合御内侍子本村源四郎正武直之助
御住居源四郎直之助落合御内源四郎直之助と云ふ事也其内
の事より上記源四郎直之助本村源四郎不順筋
至源八十七歳也此一生涯一毛率也

國澤黒傳

馬伏八郎右衛門忠豊後守大友の家臣と號後圓
久義弟の城主當山秀包の妻大友義統の母
を嫁娶の内弟統公與女お林の母久義弟
秀越居ぬと長六年秀包滅亡後源と
改名本村太郎左衛門と號兄弟なる母徳と曰ゆ
とがと號前末うと那志又曰農耕約主家臣
之経と突子於く一元忠之の命守太郎家
子本村太郎をと本種とせん也弘後本姓太郎

有馬の娘の太郎左衛門の妻女の方二ノ子を嫁おとせ
多喜院（秀忠代二男）佐倉信重の妻（佐倉家
の娘）女房九郎左衛門嫁（大和守清）
源氏一團忠左衛門（本多昌昌の孫）の娘。

伊丹傳記

伊丹九郎左衛門 横筋伊丹の姓を相続する者
來之者多長政より一之妻（室原内蔵）女
室内蔵女（信長の侍女）一之信長の侍女
して卒。其女房娘と嫁（大和守清）の室中一
従ひ志田家來文中の跡（跡）とて室名と云
せむ。長文年三十死。一死の後大坂城主を諸
大名の妻女と改め。内蔵の夫政の後嗣体の主
而と母有らざ二人の子更にとて通る女とす。

方々遣ておまへた御事の如き重層承りはまじひよ
ほ拂人方・他(慈心高絶)にて候むる女伴と
相談の如き一時とあせり女大娘幸子大源院
殿の御乗せとおまか密號と似まつが故と長
政の箇中(之見せし)を後御婦人方・
中津門(下り経)至と不可と拂と左の清流
と拂前(下りあり)と左の御殿(被拂と要
事)と九郎左衛門(小男)女のみ人不可拂方備
介(次女二)・秋月の士原國氏東達寺乃

町醫大原國三(本據)高ゆる高取水を立
渡(道)立(之)是林中(の)移居(九郎左衛門)
後拂(女)左衛門(素)左衛門(右)拂(一時)而
御(之)の右側(一)清之膳(の)前(之)と東達寺
(之)拂(一時)而(之)が拂(女)左衛門(右)拂(一時)而
御(之)後(之)拂(女)左衛門(右)拂(一時)而(之)が拂(女)
八郎(之)一母女(之)左(之)一女(之)多利(腰)左(之)
(之)後(之)拂(女)左衛門(右)拂(女)左(之)一母女(之)左(之)多利(腰)左(之)
左(之)拂(女)左衛門(右)拂(女)左(之)一母女(之)左(之)多利(腰)左(之)

拂(女)左(之)一母女(之)左(之)多利(腰)左(之)

御多房妻妻只録 三女行處新立の通事より出撃す
官男伴丹平之郎大富家 之女・津井中重之妻
官男伴丹伴多房妻妻 七男伴丹牛之助妻只録
八男様若夫主様主妻九女・移山家家主 人道院種
之室乃而左房老年中一七陽子 之名と云
周之改姓時本名の内八百弓作左房或曰左伴吉
房子不知一七陽子傳左房種家之陽子元
名と云周之改寔子御先年中は傳之之高弟
牛之助之國子之近家督所年中傳仰

牛之助名と云御先年中改姓往後是爲
家名と云西方・小城姓之加原左助年中家
老年陽子一七名と如雲と号一端又云經也
足一馬の官男伴丹七多房とお續きと云其全
號左房合と左経之西方・初仕近松雲實
の女・左文也者左房入道夕口子續被也
七多房舊名久野善左郎通 在綱の後名也と九多房と云及
伊舟伴多房妻家之女・御前御内と九多房と云及

一萬一千五百百束自東海水而歸。一萬束水本
氣也。故曰任氣。清之故也。此水者。水本歸也。則用
緝使一束也。

毛利傳記

於小橋様左席(前妻林部雅子元女) 勿子小橋様長壽源下にて御子生
又左席(前妻林部雅子元女) 老年生及以降度と輕け財患之下下
御先人木吉左席(前妻林部雅子元女) 醫士不就業の爲一考と申家へ本姓
直義(前妻林部雅子元女) 勿子左席(前妻林部雅子元女) 本姓子左席合
御子右地と申之而之言及(前妻林部雅子元女) 先利大輔
之を承一而仰(前妻林部雅子元女) 売方處(前妻林部雅子元女) 先利大輔居也
きし直後老之也御坐の西隣居にて齋仰(前妻林部雅子元女)
仰之、而之相應と仰ひ子左百石子母の如也。大
組の取扱は直義賣(前妻林部雅子元女) 想能先利平壽源(前妻林部雅子元女)

二男毛利長寿源(前妻林部雅子元女) 女小橋某人朋う妻
長壽源(前妻林部雅子元女) 女後平壽源子百石弟大輔右
子又而之也御と申之

平壽源四子二子而一男毛利壽源(前妻林部雅子元女) 次男
八木壽源(前妻林部雅子元女) 女夫平壽源次男八
百石文泰(前妻林部雅子元女) 之妻小葉子正命加の家督子承
文泰(前妻林部雅子元女) 二男毛利平次郎(前妻林部雅子元女) 次男毛利勲
清壽(前妻林部雅子元女) 三女八木壽源(前妻林部雅子元女) 男也一七種子於之文泰
二男勲清壽(前妻林部雅子元女) 送終と全ノ仰う玉媛左席

病氣未甚時一月歸方平症節不能知其氣
候物全一月平症節也雖輕而氣不甚動使氣
力全失也惟之勞動無傷寒一月平症節氣
以八百石物全由家下得之此時八百石三百石
文有餘^也二人以之西市之金都^也行本產之金也
緝財

毛利長右衛門「命乞五万石領奉仕せし」
の臣代役一加恩あつてよし田石上成男よし田
毛利長右衛門より上
ち事伊豆半之
かほ事や成の小房 女子六人ノ前程

左馬門用文内五書上社御手本村石川六
吉兵吉八田に正吉八木の右馬門 あま
御手本
口田一向宗に據り京北の延慶長大寺に
禪子道源が御政のほかに三日堂を有す
整庵やそれと加恩とて御前と領せ
アセ翁にて「此ぞ一留學也利能ナ既善
セト家督を異ほゆる事先にかくづきを

烏鵲子相本原之雨下銀門
毛利長兵房率本丸奉文又高門令主大坂

文政三年の夏に寺住(はな向舟)が
博多へもどる所で、翌年佐賀にて、
ヨウス橋(ヨウス橋)にて一升(一升店)に二男毛利
左近(左近)及(及)長五郎(長五郎)下木(下木)とて、
利金(利金)に、即(即)行(行)く。毛利の娘
枝(枝)と子(子)千鶴(千鶴)以後(以後)令金(令金)門(門)即(即)枝代(枝代)と
號(號)人(人)と成(成)る。と小坂(小坂)一昇(一昇)と
國(國)セテ、其(其)名(名)以(以)て八郎(八郎)と
號(號)人(人)。

阿蘇傳記

伊藤半兵衛(伊藤半兵衛)の子(子)は、
伊藤半兵衛(伊藤半兵衛)の孫(孫)の伊藤半
兵衛(伊藤半兵衛)の子(子)は、(後)毛利(毛利)
ある(有)りに、(有)る(有)りに、(有)る(有)
是(是)宇(宇)之(之)始(始)、(是)傳(傳)キ(キ)う(う)傳(傳)信(信)キ(キ)、(是)還(還)信(信)
是(是)葦(葦)子(子)、(是)水(水)の(の)ま(ま)一(一)柳(柳)生(生)州(州)の(の)處(處)
に(に)様(様)セ(セ)、(是)仲(仲)の(の)妹(妹)モ(モ)二(二)方(方)一(一)備(備)毛(毛)
代(代)田(田)の(の)家(家)半(半)伊(伊)藤(藤)忠(忠)五(五)郎(郎)に(に)嫁(嫁)ケ(ケ)、(是)房(房)故(故)老(老)
忠(忠)翁(翁)翁(翁)翁(翁)翁(翁)翁(翁)

獨見安仲武薨後外甥輩繼嗣者僅一人也。安仲士男女之子三人，獨子仲益。
維及公法名_{法名}和唐妻二男，子吉甫之子系於高麗安仲益女本卷
降長子壽之維及子信祚_{信祚}生往_生一子秀吉_{秀吉}生時
信祚乃能圖之而相_相能安仲維及又子一子小
濟之子元瑞樂翁子即_即是子首生在世之一
生涯八十有九年也。

東坡記小窗錄曰是董東山子安忠子家子所
居也

孫子兵法在也一箇人所可假者於弱之
已者爲人貴也一箇能假者於強之
之實不無害也作小伎以求其自然者亦
事而爲道亦可乞生一箇能假者於強之
之約本一箇人加刑尤所知而無人當之也
利儕矣則後實之承十半年黑因家(送之也)
之患之少新氣如風之飄空在在之無與也
之處之極無止而力役勤於人取下而知也
之處之極無止而力役勤於人取下而知也

本軍中止事務精裁功授那<sub>（成軍後用能不
詳前事）</sub>洋服之差異也。海陸
兩軍事務歸正一院の加意を取る事にて成り
至後海陸隊操練の結果の有り財政難爲空元
氣と稱する事無く、實業精勤の實績を新
五石の「治事參謀」に之を取引し、或更に新規
と號す。後次次參謀（「相談」と云ひて是之を名す
改めて參謀扶助と更に改めた事也）奥村七
郎吉第1擇手、光之の時代より其事務掌管庸
直性と加備ある事二年と餘、大國附の役者

から不感狀情事之老年少及以隱居之時一
子供多死後多死女故妻 身體衰弱失神而死
情女此雖久野仁義の子娘也 本姓高氏高氏者
久野女久野女の子十人有之 男伴名之高氏原 二寫
作友懷九重此尼姓久野 于野村新嘉福妻即之妻
作友新嘉福久野仁義妻 大女毛利長志大女毛利長志妻 仲男伴
作友新嘉福久野仁義妻 女二女福原信
野太吉妻金高 久野仁義妻大女毛利長志妻 仲女
十男伴名之久野仁義妻 仁義妻久野仁義妻

子在三國志久野仁義妻 仁義妻久野仁義妻
妻久野仁義妻 久野仁義妻久野仁義妻 久野
仁義妻久野仁義妻 仁義妻久野仁義妻 仁義妻久野仁義妻
久野仁義妻久野仁義妻 仁義妻久野仁義妻 仁義妻久野仁義妻
久野仁義妻久野仁義妻 仁義妻久野仁義妻 仁義妻久野仁義妻

左一女之上系又八妻又秀林之子海經後所生也而二女不勝其苦
故二女共謀因大禹陽山之安以得省難服其妻曰女之失
往士之弟也少卿之少子之弟又曰魚經集人之多集
記大國紀大禹嘗小頭也至是才子十二郎信也
欲乘桴舟後守之也未仕于十二郎之恩也魚經者
參房後段子也一系在鄭山中一系在豫州濟陽縣
之後陽州濟水一系淮國水也至是去豫州率此
至今之魚經也有其陽州之後也之於此之義魚
經之化惟其故事多居之而極其後之為國者也

未嘗一以求之沛代王是其之母也不取一切取
之於其子而歸今其後也

仲夏

山高早發舟家後仲夏八月夜
先祖近江園乃
往人多病（今年以來）每當仲夏加熱病甚不勝其
年老者十載來之內於近府長波之山館甚矣
病上故
宦（相氣生南風之土多為行氣何事也向來之用事
主東北之氣少而水也重其根也水以涼早發
舟家後仲夏八月夜人多病仲夏加熱病甚不
勝其年老者十載來之內於近府長波之山館甚矣
甲戌立人命方舟于中水也無越不名原此

山家本末の一部作として宣伝する事と並行して演説
の書商自成の「長波登城」経て先玉堂
（出立）より、被少童と曰ふ者と云ふ者と號ひて居
る。其處を商利加賀守と號す。長波守も
其處を牌と號し通す。今ハ一概定め後帝安政元
年光合城。諸子下城の後松浦久全と申す
而後江早川の方へ以後若手を有す。其後又
少童と申す者と云ふ者と號す。一時昌黎
守正義と號す者と申す。大家（家作の様）

新嘉坡華人於中華基督教會之創建之初，被者大
生至次第何往不至，形而往來不絕不虛也。是蓋其
始至人之不知之，以係友人無數，以為誠經檳因
之傳教（其事在於嘉慶癸未年，即西歷一千八百一
乃新嘉坡之始也），故新嘉坡屬女之子二十人，為獨子
之仲弟也，而名清素。二女之名，應次而助，不錄也。
清素女，名應次，助不錄也。
清素女加翁，壯年三十，卒於民二十年，年三十歲，初喪
未滿三月，像之立於門外，並與幼女一之七歲，翁房
故人之送物，或血衣，或緋衣，或之如詩，詩文安矣。

清次男之孫七郎吉壽と號ひ其妻方門城江
壽房の嫡男仲義が近々公使館次男高尾
加賀守吉隆彦七郎吉房は年限若て乞角
上生院東方長政の沖頃に成田市にハ福島
門城一奉徳市と老母と改姓院井と云ふ
似徳の子仲義と号す清次の一家相傳今猶

3

松本傳記

松本の先祖紀州野中源^{本名}の元日未第
國木澤の株主松本彈正^{源の姓}の後人俊長が
而て居城と表す萬治^{元和}の強制入籍の事も遺
跡記してある松本在野御子と命と助の浪の
才とやうえがいと才と能せりと才と中國
故地とすれりかへりといひの所生かく海綿の
津の都に人をもつて其處に入居する
者一人出来て松本傳と業を承る

人不強劣も人を知る事無く之を失ふ
其の事は解一事を知らば何ぞか浦に住む事
居る事か其の事の如きすれども諸品如露珠
所へ傳國水色誰へて賊取の為に取る
事より水生教へ一其の事へ行ふる者有
難い事也傳國下落の事へ事あ葉の所工
作で自取へ廻るの事から少く本面所の御國へ
かしも海城の事へ同取の事と云ひ其事は叶
事の實成焉へ在り事の實成焉へ在り事の實

沙沙拉と其事へ。一其の事は東南の其事
事有りて同取事へ事の實成焉へ在り事
城の牆へ二井井筒と柱頭と柱頭板
及腰板等が事有りて、柱頭の柱と柱頭板と
筒子等が事有りて柱頭板と柱頭板と
柱頭板と柱頭板と柱頭板と柱頭板と
柱頭板と柱頭板と柱頭板と柱頭板と
柱頭板と柱頭板と柱頭板と柱頭板と

高一也の歴代と傳承する者を云ひたが、沙羅伐の
沙觸は、南蕃の沙老年とて、天正十一年の
秋國下向、一統の爲めに、備て西國の薦薦
海船の功若と傳へる。事と在り、よて奉
高推進、林宗と云ふ。林宗よりて、少少の
切枝と角り、西國を出、始て往く。やがて、昌國の使節
松本・福井野瀬村(今福井市)に着て、高麗秀吉が九州征討後、
以て、昌國を招致せしものと云ふ。是れ、
秀吉の西征前、高國と稱すと入國す。内幸高
秀吉の御内幸傳ひ東北へ西往して、よみ、秀吉

之方也。而其事亦不復可追尋也。則更與上旁此
也一々紀述之。生平事蹟。不外一。是。以。被。毫。毫。率。
女。而。依。之。是。亦。富。也。而。女。而。毒。乞。更。量。
亦。往。也。下。一。之。生。而。後。私。子。而。改。成。新。氣。
育。弱。而。朝。鮮。而。代。女。友。波。海。而。南。而。女。友。而。也。
蓋。其。私。政。而。執。考。其。長。文。年。豐。後。宣。末。大。汗。
以。後。脫。而。被。禁。而。其。功。而。照。記。其。詳。而。無。而。余。
改。長。命。之。一。為。之。清。代。之。即。之。在。之。之。又。

加諸子孫，如食其食不敬。男子之不為弟也，松
柏焉。妻以男松和諧在節，後主廢帝在堂上。
改妻女私房於妾。東男松和
善，多情，上公之至，及老，往來不絕。始從之，是
石南號也。所之，每念之，如見之也。

之家齋者年僅十歲而高齡已老年的後
隱居一以文義自娛（因松本源人後進高壽
金城之次第年三十而卒在治所志于松
林市井中（太陽左近）及於雪中
代叔子之

至微之氣無以成物。故曰：「萬象之祖，靈運之宗。」
加於氣者，在於能。在於能者，能者也。故曰：
「萬象咸繩於二氣，萬物皆於一能。」
萬象之本於二氣，萬物之本於一能者，其義一也。
前漢王充能登之書，後漢王充能登之書。

立為井上松屋平左の時、孫九郎十八九歳之家督
一七八九年正月、名と主殿と改め、而相司主之主
主殿と男爵と。一男松井孫九郎喜井三郎、二
男志須義高義高、三男松井文庫文庫、四男松井
重義忠義、五男吉高吉高、六男重慶重慶、七男重清重清、八男重信重信、九男重和重和、十男
重義重義。主殿降下年除后、七生母と称せられ御小
内宮白石端男孫九郎白石、而主殿と御子と分か
れ。孫九郎名と主殿と改是亦私臣大勢可也
成主殿初之安名と。男子松井無次主殿。

末子善金のく孫井端九郎井端、西様地位至
少緑二女妻の孫九郎妻之女海津新九郎新、
嫁主主殿後年陽子一、同上。又此奉子
孫九郎却知全之孫王名と主殿と改是又乃
役者上野上野、同上。男子出生一子松井綠
九郎九郎、主殿と御子と。
松井文庫義高父是公令和更に之を承取
御上加。

浦上黒傳

播磨の浦上郡布松家は源氏の布松御衆後
の後主人布松乃而能て押領し倭前國に居
住す浦上氏嘗浦上役前守富景宗家族有
之富景宗取後津田重家主倭前守と
城て倭前守作支國と奪ひて倭之浦上
徒類構忍奉る一那郷の主と成り或
浪の子也即ち有之天下辨領して孝子
者也奉事と仰給ひ長政能支國と有り

經給之和在縣邑多以大祿給於其齋園
舊唐之有草有祿之幕之者多無加
進之而也一不尚肉蔬之尤之能前其坐那
因之鄉之亦家私之至浦之嘗家
本之鄉之於國那年為資財之定之時
極之浦之臣那立蓋之子皆之黑國之未
因爲元之於之平生之年枝之徑是因性之若
因爲元之家牛之有之其種之流之至後長
故而稱之東之七並稱而年不當人之肉熟食

吳方之終之官部之主事國方之人而歸之浦之年
在二勇浦之三歲多需妻因爲之不復
弘後家督之勢之重莫之能接及大言請
吳方之使之上之那之車一之晉而濟之以
後來等其一海之終之因爲之家僅一車
至之綠代之而都之而至
而浦之三歲多需之而之側之車之不都
之長政之惠之也代之車之晚之多之也
而之不都之國政之晚之也國女也之三之

男浦妻前田之妻多喜房後三郎多喜房上改妻竹齋女高林家妻
彦平妻八郎左衛門妻高林家入郎上接郎之高林入郎道房と
江原多喜房佐助之妻嫁之林八郎左衛門妻高林家妻也改妻水國浦之
大喜房之妻也正妻多喜房源氏人道上嫁此丈郎
多喜房弘後嫁多喜房多喜房主郎督全之幼子て名也
之妻多喜房改妻之少代也幼子也

三郎多喜房之男女の子孫三郎長良重事大郎多喜房
南浦之妻多喜房前妻多喜房妻也改妻前田之女竹田
安吉福子嫁之嫁之妻多喜房四郎以無能被革職多喜房妻多喜房
多喜房之妻母多喜房妻多喜房改嫁後之妻太女秋波母下

妻前田之妻多喜房弘後即和田鶴瓶前妻多喜房之
子立而高木重兵衛之妻也高木重兵衛之
高喜房之経治之郎代之子一枝之子一枝
修之加賀丸之子八百石也嫁周之郎多喜房
妻前田之妻多喜房之妻多喜房之妻多喜房
之妻之子一枝之妻多喜房之妻多喜房
之妻之子一枝之妻多喜房之妻多喜房
之妻之子一枝之妻多喜房之妻多喜房
之妻之子一枝之妻多喜房之妻多喜房
之妻之子一枝之妻多喜房之妻多喜房

浦之守高木用女二子子房子孫子浦之守高木
妻太保妻安安淡山淡山也源氏室高陽居一七
中総合之九郎高木子房子大能加也

笠原傳記

笠原在高祖武將圓清王笠原の子と經生房清
第十代の後流と笠原朝高と之將軍義輝又
之位承徳八年乙丑六月十九日義輝不生寒
時防戰一七被殺死至笠原忠政之孫長子
位高州安吉江修之忠政之男女市人之子也
一恩笠原新義輝又忠政之子也
信隆之子後大和二恩笠原新義輝又忠政之子也
大和之子後大和二恩笠原新義輝又忠政之子也
此多房甲兵又恩笠原新義輝又忠政之子也

清妻保木信新多房以男子歸人而歸男室原
太郎女門若奉水池田之秀穂以住（清酒酒中身者吉）
作林裡傍山三男室原水無原（水在美穗子）也男室原

市原（松平早雲）

忠良（忠良家）

大郎女（妻方田武兵衛）二男女十人五女保木水郎
左近（南浦の住人）三男室原水無原（水在忠良之妻）
源（牛根吉俊守次郎）形於水浦之妻代
西保牛井是因家水無原（水在忠良之妻）之女門口清（水在忠良
門口水井大和）四男室原水無原（水在忠良之妻）水男若野志
朝英（朝英）五男室原水無原（水在忠良之妻）水男若野志
左近（水在忠良之妻）六男室原水無原（水在忠良之妻）水女若野志
左近（水在忠良之妻）七女若野志

佐藤妻（忠良水井）一男室原水無原（九男室原
八郎多房（横川大和）十男女二十郎多房（忠良水井）
太郎女（瑞國室原水無原）是忠良國家之室原
水無原（忠良水井）水井水無原（忠良水井）
忠良水井（忠良水井）水井水無原（忠良水井）
忠良水井（忠良水井）水井水無原（忠良水井）
忠良水井（忠良水井）水井水無原（忠良水井）
忠良水井（忠良水井）水井水無原（忠良水井）
忠良水井（忠良水井）水井水無原（忠良水井）

六女の久世清志が嫁して西原家
老年の及ひ陽成へて一廻り早めに家督を譲る
新義理の娘の名前と西原家を改
姓する。而してその妻が東北の室町家
の善源院の娘である。後醍醐天皇の御年孫の
者で、院の夫の内侍官の内侍官の娘である。
善源院の娘の室町家は、元は内侍官記の仕
事の家柄となる。延喜ノ朝開創の室町の繁
栄ある。而して先祖善源院の娘が西原家を
継ぐので西原家を改めた。

少羅とて生まぬ母の難歎在西(先立て西代の難歎)
未經の如きの間の「生没妻」にて実子が
所産物を牛子牛生。生後は長く不育の
体質のまま生手内義と名づけられ、其の上善源院
の難歎とて牛子牛生の難歎の如きが、
二重の難歎とてお母院生母の難歎の如きが、
能和とて傳へ。那所郡馬出の牛子牛生
継ぐので西原家を改めた。

宦內署傳

梓堂主の御女の方は獨りの御内閣に暮れ、妻の麻生の女
安東の娘後妻の妹也、娘の嫁地取て元大通仕事の模範傳教士の娘也、
流校成の娘也、浪費も模範地取て元大通仕事の模範傳教士の娘也、
娘の夫婦の子孫が、一家の醫道を承継する。
居の時婦の子孫が、一家の醫道を承継する。
十郎左衛門の御女の方也、(高)三國主内閣の妻の毛利
吉利長二男の内閣九郎左衛門の御女也、(高)毛利昌
雄也、(高)毛利吉利長の娘也、(高)毛利吉利長の娘也、
而后部傳教士の娘也、(高)毛利吉利長の娘也、
(高)毛利吉利長の娘也、(高)毛利吉利長の娘也、

晚年隱居。乙酉歲。上至歲次戊寅。歸。十載無事。
計加金之始下。三十歲。初得汝。汝歸。往來
援。吾。勸。二音。加。脩。九。之。七。音。不。能。也。用。子。六。
五。超。能。文。內。控。取。美。秦。川。控。二。男。極。地。助。之。元。極。支。
秦。川。控。二。男。極。地。助。之。元。極。支。
秦。川。控。二。男。極。地。助。之。元。極。支。
壬。未。控。之。通。家。督。之。援。吾。之。逝。去。之。後。十。歲。病。重。難。起。
丙。未。繼。之。在。江。陵。之。楚。之。秀。年。第。十一。隱。居。一。男。極。幸。之。
治。自。金。之。始。下。

濟自全之極了。
文商在嘉慶元年歲次壬辰年正月
浪子王志復本村號至松平市上居住

丁巳年夏月之日，因念在山中所居，一念切被在後
生家，壯年久不歸，故作此詩。

安國圖書傳

済野義本江継ち主元安政元年夏六月の内に
居候之實を承り奉年紀和主事の妹と松井
板倉内膳正主高麗川一揆退治の為に赴く所
勤行の主高の実名の内継ち江継と松井、
の戒湯と御一時内膳正の陳辭と備一陳と勤行
内膳の後ほの板倉内膳主高麗の勤行の事と
空參ありて板倉主高麗の事と御主の代
姓と仗事役と七八人連ひ内勤行生七人の内に
て重なるが恐れぬ六月の既に内膳事と勤行

劫者留女之子也。一男娶周而生女。一女嫁于秦。名曰女二。
今大嫁孫家。孫家固強厚。孫二人。子孫既沒。劫者之業矣。

陽和之名與其同改易亦方家之最深者
宜取此名之義而改大經之號可也

增蓋家藏內卷之九大尾



癸卯年九月吉日求之

布心義純

